

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イスパノアメリカにおける過去指示 después de que
の法について：メキシコを中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): después de que, メキシコ, イスパノアメリカ, 接続法, 叙法 キーワード (En): 作成者: 辻井, 宗明 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006041

イSPANOAメリカにおける過去指示 después de que の法について

— メキシコを中心に —

辻井 宗 明

要 旨

辻井 (2003) や Tsujii (2008) において、スペインにおける過去指示 después de que の法を観察し、圧倒的な接続法化が進んでいることを確認した。そして、純粋な時間関係から抽象的時間関係へという、同統語条件のもと意味機能の変遷と接続法化の相関を結論した。しかしながら、イSPANOAメリカでの同用法に関しては詳細な報告がない。そこで同地域のいくつかの国々を統計的に観察した結果、使用される法に関して、スペインとは正反対の傾向を示す国々があり、その中で資料が比較的豊富なメキシコにおける同用法を、論理的、及び社会言語学的観点から考察した。その結果、メキシコでの同統語条件の法選択には、スペインにおける言語使用の影響と、ある社会言語学的偏りがあるのではないかという仮定的な結論にたどりついた。

キーワード： después de que、メキシコ、イSPANOAメリカ、接続法、叙法

0. はじめに

辻井 (2003) において、スペインにおける過去指示 después de que の接続法使用が圧倒的に進んでいることを確認し、辻井 (2008)、及び Tsujii (2008) では、法選択の変化を después que から después de que への形態・統語論的変遷に伴う、主節と従属節の意味の論理関係の変化に求めた¹⁾。さて、イSPANOAメリカにおける過去指示 después de que の法選択の現状はどのようなのだろうか。Real Academia Española (以後 R.A.E. と称す) には次のような記述がある。

El uso del subjuntivo es compartido por el español europeo, en el que constituye la opción mayoritaria: ... En cambio, el indicativo es habitual en el español americano en estas construcciones temporales... (R.A.E., 2009, p.1954)

すなわち、アメリカスペイン語では直説法が普通に使われるが、ヨーロッパでは接続法が優勢である、ということである。ただ、そのような傾向は“el español americano”という一括り

でいいのだろうか。また、その意味機能をつぶさに観察した場合、スペインと同じような用法があるのだろうか。あるいはまた、スペイン語教育において、過去指示 *después de que* の法選択はどのように扱うべきなのであろうか。本稿ではイスマノアメリカの国々すべてを網羅することはできないが、最初に全体を統計的に概観した後、興味深い地域に焦点をあてて調査し、現状を確認したいと思う。

1. イスマノアメリカの国々における調査

前述のように、イスマノアメリカを対象にするとはいえ、その範囲は広大であり、国や地域によってどのような偏りを見せるのかをまず検証してみよう。その上でそれぞれの対象国・地域を絞っていく必要があるだろう。まず全体的な傾向を把握するための調査に関して、その対象国を決定する。そこで、R.A.E. の CORPES XXI (Corpus del Español del Siglo XXI) が採用している“América”の言語地域区分 (zonas lingüísticas habituales) を参考にした。ここでは、次のような区分が提示されている (ただし、Estados Unidos は除く)。

(Zonas)	(Países)
Andina	: Bolivia, Ecuador, Perú
Antillas(caribeña)	: Cuba, Puerto Rico, República Dominicana
Caribe continental	: Colombia, Venezuela
Chilena	: Chile
México y Centroamérica	: Costa Rica, El Salvador, Guatemala, México, Nicaragua, Panamá
Río de la Plata	: Argentina, Paraguay, Uruguay

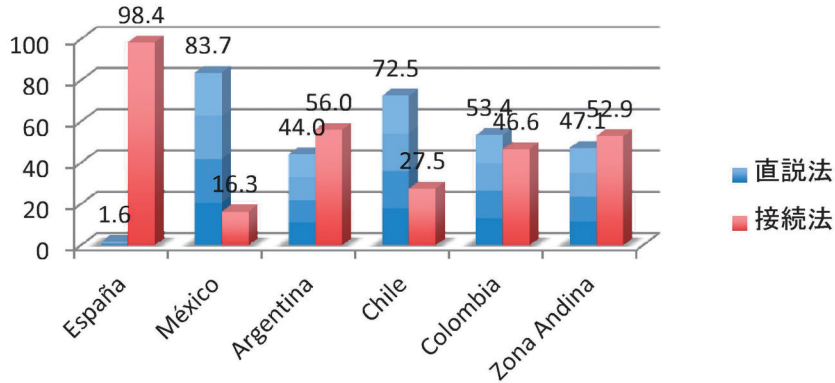
これら6地域 (zonas) のそれぞれからひとつの代表国を選択して *después de que* において使用されている法を調査してみた²⁾。コーパスは、スペインの頻度調査でも利用した R.A.E. の CREA (Corpus de Referencia del Español Actual) を使った。対象時期は1990年代としたのだが³⁾、これは辻井 (2003) のスペインにおける調査が1990年代であったので、その数値と比較するためである。

“過去指示 *después de que* + 接続法”は、スペインにおいて時事的なスペイン語を扱う新聞や雑誌で使われ始めた、あるいは豊富であると言われていることから⁴⁾、媒体 (Medio) として“Periódicos”と“Revistas”を選び、その調査結果を表1とグラフ1に示す。なお、Españaの数値は辻井 (2003) のものである。

<表1：イスマノアメリカにおける después de que の法（1990年代 “Periódicos” と “Revistas”）>（単位：例）⁵⁾

	España	México	Argentina	Chile	Colombia	Zona Andina
直説法	1 (1.6%)	108 (83.7%)	22 (44.0%)	50 (72.5%)	55 (53.4%)	16 (47.1%)
接続法	62 (98.4%)	21 (16.3%)	28 (56.0%)	19 (27.5%)	48 (46.6%)	18 (52.9%)
計	63 (100%)	129 (100%)	50 (100%)	69 (100%)	103 (100%)	34 (100%)

<グラフ1：イスマノアメリカにおける después de que の法（1990年代 “Periódicos” と “Revistas”）（単位：%）>

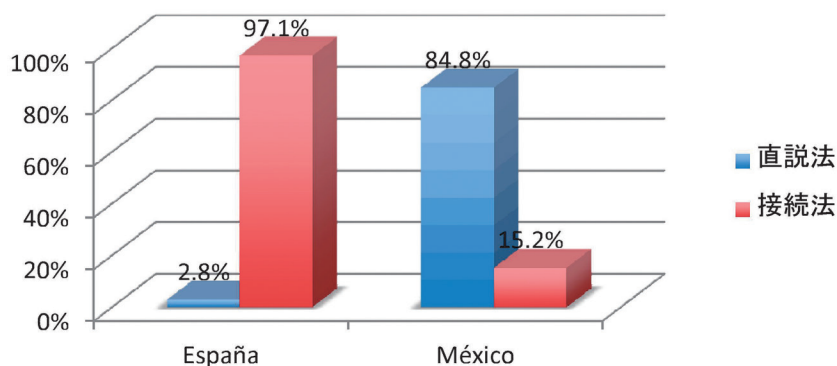


この結果を見る限り、1990年代には、コロンビアや Zona Andina では直説法と接続法が同程度、アルゼンチンは若干接続法が優勢のようである。一方、チリのように直説法が優勢であったり、メキシコに至っては圧倒的に伝統的な法選択をしていることも確認できる。媒体を “Libros” にすればどうなるかを知りたいところであるが、残念ながら “Libros” の全体の例数が限られているため統計処理には使いにくい⁶⁾。そこで最も接続法使用率が低いメキシコと最も高いスペインにおいてのみ “Libros” で調査を行った。

<表 2 : después de que における法 (1990年代の “Libros”) > (単位 : 例)

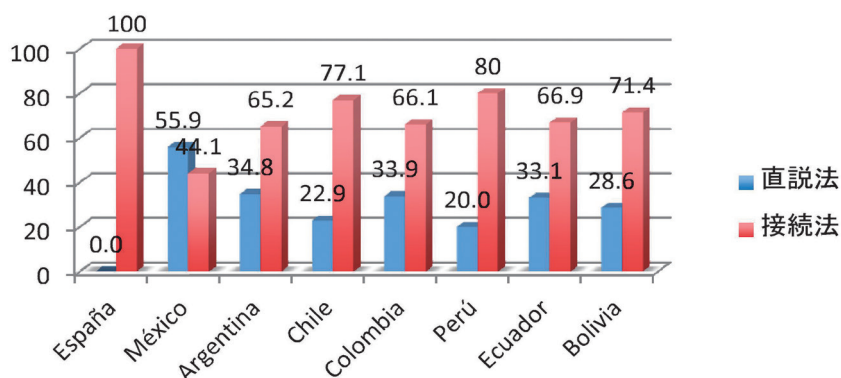
	España	México
直説法	4 (2.8%)	67 (84.8%)
接続法	136 (97.1%)	12 (15.2%)
計	140 (100%)	79 (100%)

<グラフ 2 : después de que における法 (1990年代の “Libros”) >



やはり1990年代のメキシコでは、スペインがすでにほぼ100%近く接続法が選択される統語条件において、直説法が優先的に使用されていることが確認できる。現在 R.A.E. の Web 上のデータバンクでは、2000年代も調査対象にされてきているので、次の10年後の動向も調査してみたところ、次のような結果であった⁷⁾。

<グラフ 3 : イスパノアメリカにおける después de que の法 (2000年代の “Prensa”) (単位 : %) >



スペイン2000年代の新聞（2005年“Prensa”）では、111例中の接続法使用率は100%であった⁸⁾。1990年代において、メキシコの次に直説法使用が多かったチリであるが、2000年代（2000年～2009年）の過去指示 después de que の法選択は、直説法19例（22.9%）：接続法64例（77.1%）であり、スペインほどではないにしても、相当接続法化が進んでいることが確認できた⁹⁾。さて、メキシコは、グラフ3で見ると、2000年代においても未だ半分以上が直説法が使われているという特殊な傾向を示している。このように異なった傾向を示す地域を、その対照にあるスペインと比較しながら調査するのは、ある形式の変遷過程を理解するのに有益であろうと思えるので、本稿ではメキシコを中心に議論を進めていくことにしよう。

2. メキシコ

2.1. メキシコの現状

本節では、2000年代においてある程度接続法化は進んできているものの、未だ半分以上が直説法が使われているメキシコを中心にして、過去指示 después de que の用法や分布を詳しく観察していくことにする。まず、過去指示 después de que で使用されている法・時制形式に関して、1990年代から2000年代への雑誌と書籍における使用の変遷を観察してみる。表3が1990年代、表4が2000年代である。

<表3： después de que における法・時制形式

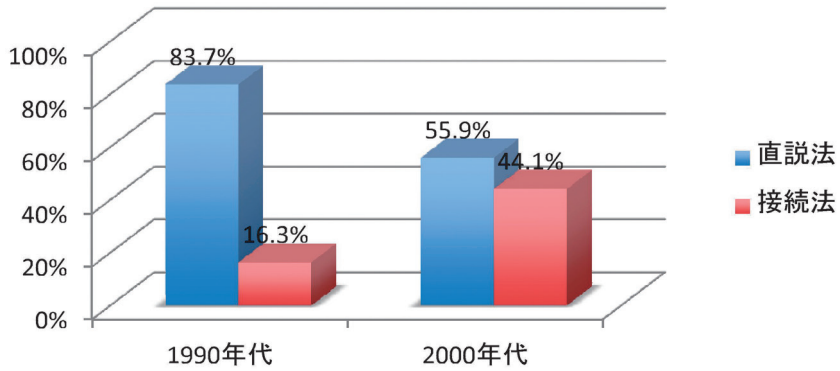
(1990年代のメキシコ“Periódicos” “Revistas” と “Libros”) > (単位：例)

法	時制形式	各形式の例数 (割合)	各法の例数 (割合)	各形式の例数 (割合)	各法の例数 (割合)
		Periódicos, Revistas		Libros	
直説法	点過去	97 (75.2%)	108 (83.7%)	53 (67.1%)	67 (84.8%)
	未完了過去	1 (0.8%)		3 (3.8%)	
	過去完了	10 (7.8%)		11 (13.9%)	
	直前過去	0		0	
接続法	-ra 形	20 (15.5%)	21 (16.3%)	10 (12.7%)	12 (15.2%)
	-se 形	0		1 (1.3%)	
	過去完了(-ra)	1 (0.8%)		1 (1.3%)	
合計		129 (100%)	129 (100%)	79 (100%)	79 (100%)

<表4：después de que における法・時制形式（2000年代のメキシコ “Prensa” と “Libro”）>（単位：例）

法	形式	各形式の例数（割合）		各法の例数（割合）	
		Prensa	Libro	Prensa	Libro
直説法	点過去	51 (50.0%)	57 (55.9%)	68 (66.7%)	81 (79.4%)
	未完了過去	4 (3.9%)		2 (2.0%)	
	過去完了	2 (2.0%)		10 (9.8%)	
	直前過去	0		1 (1.0%)	
接続法	-ra 形	41 (40.2%)	45 (44.1%)	18 (17.6%)	21 (20.6%)
	-se 形	4 (3.9%)		0	
	過去完了(-ra)	0		3 (2.9%)	
合計		102 (100%)	102 (100%)	102 (100%)	102 (100%)

<グラフ4：メキシコ（新聞・雑誌）の después de que における法の変遷>



<グラフ5：メキシコ（書籍）の después de que における法の変遷>

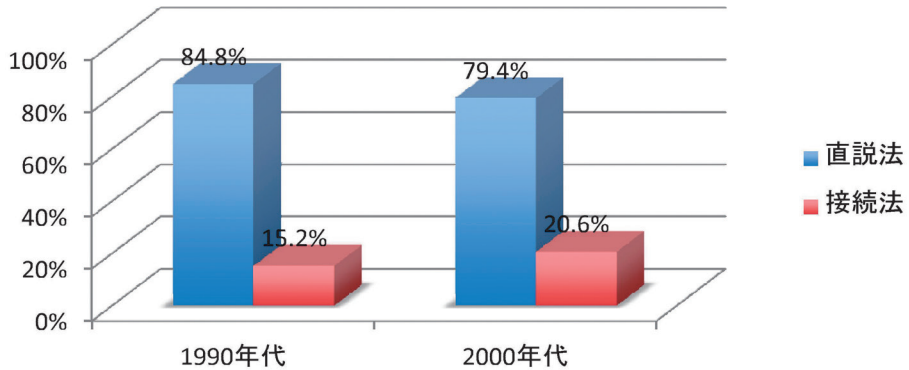


表4は、2004年から2006年までの3年間について、Medioを“Prensa”と“Libro”にして調査したものであり、グラフ4及び5では、1990年代から2000年代への変遷を棒グラフで示したものである。メキシコの過去指示 *después de que* における接続法選択率は、この約10年間で、新聞・雑誌では約16.3%から約44.1%に一気に上昇していることがわかる。ただ、書籍では、15.2%から20.6%へと少しは上昇するものの、スペインと比べると依然低い数値を示していることが確認できる。

2.2. “過去指示 *después de que*+ 接続法” の意味機能

上記のような数値の推移から判断すると、メキシコにおける過去指示 *después de que* は、その文法上の法環境が変革しつつある段階にあると考えられる。このような過渡期をつぶさに調査してこそ、*después de que* の法環境の変化の要因が捉えられるのではないだろうか。辻井(2008)では、その要因を、「純粋な時間関係」から「抽象的時間関係」への意味機能の変化であるとした。すなわち、次の用例は、1990年代のスペインのものであるが、*después de que* が「～の後」という純粋な時間関係を表しているとはとても思えない。

- (1) ...entre ocho y diez millones de personas viven en condiciones de pobreza, **después de que** durante la última década crecieran notablemente las diferencias entre pobres y ricos. (1995, AUTOR: Ramírez Codina, Pedro J., TÍTULO: *David contra Goliat. Jaque mate al felipismo*)

「ここ10年の間に貧富の差が著しく広がったため(広がった後)、800~1000万の人々が貧困状態で生活している」(辻井2008, p.101)

ここでの主節と従属節の論理関係は、「～の後」という時間関係だけではなく、むしろ、貧富の差が広がったことによって多くの人々が困窮しているという、時間関係に由来する「原因」を表す論理関係だと捉えられる¹⁰⁾。

- (2) ... **después de que** Melchor Miralles, con un fotógrafo de Diario 16, cogiera in fraganti al colaborador de Interior Francisco Paesa presionando a la novia de Michel Domínguez, y el juez, a la vista de las pruebas y de la declaración de la chica, ordenó detenerle, resultó que los policías lo perdieron en un semáforo. (1995, AUTOR: Ramírez Codina, Pedro J., TÍTULO: *David contra Goliat. Jaque mate al felipismo*.)

「Melchor Miralles は、Diario 16のカメラマンと共に、Michel Domínguez の恋人をたたいて Francisco Paesa の共犯者を現行犯逮捕し(たが/した後)、裁判所は証拠と女の

証言から彼の逮捕を命じたが（命じた後）、結局警察は信号で彼を取り逃がしてしまった」（辻井2008, p.101）

(2)の例においても純粋な時間関係のみを扱っているとは考えられない。現行犯逮捕して逮捕を命じたけれども、取り逃がしたという主節と従属節の論理関係としては、むしろ「逆接」と捉えられるだろう。つまり、después de que のもつ後時性、すなわち主節の行為に対する従属節の前時性が広く解釈され、原因や逆接として利用されているのだろう。これについて、辻井(2008)でも指摘したが、Méndez Gracia de Paredes は次のように説明している。

El hecho de que estos subordinantes introduzcan una acción, la subordinada, anterior a una segunda acción, la principal, favorece las interferencias entre 《temporalidad》 y 《causalidad》, que se hacen más intensas porque, a menudo, una acción anterior se interpreta como el motivo que origina la segunda acción. (Méndez Gracia de Paredes, 1995, p.142)

「このような従属節語句（pues que や después (de) que）が、従属節に、主節の行為に対する前時的な行為を導くと、『時』と『原因』の間で相互干渉が起り、これは、前時的な行為が主節の行為を引き起こす原因として解釈されることによって、より強くなってくるのである。」

また、彼は「時」から「原因」への変化について、まず、時間関係が結果関係に、そして、そこから無意識的に論理的結果や「実質的原因」に移行するのだとしている¹¹⁾。すなわち、話し手の側からすれば、従属節の主節に対する前時性だけを示して、それ以上の詳細な論理性（「原因」、「逆接」、「付帯状況」など）の解釈を聞き手に任せてしまう方法であり、分詞構文と同じく非常に経済的な表現手段であるといえることができる¹²⁾。辻井(2003)と辻井(2008)におけるスペインに関する調査では、純粋な時間関係、すなわち従属節の主節に対する前時性ではなく、用例(1)や(2)のような論理関係を扱うのに“después de que + 接続法”が多く使われていることを確認することができた。おそらくそれは、直説法を接続法にすることによって「陳述性」を引き下げ「素材性」¹³⁾を引き上げて抽象性を増大させているのだと解釈できる。

2.3. 用例の検討

それでは、メキシコのスペイン語でも過去指示 después de que が主節に対して、スペインと同じように抽象的な時間関係、すなわち、従属節が主節に対してもっている前時性に由来する原因や逆接などを表す用例があるのだろうか。2000年代（2004年～2006年）の“Prensa”

102例を対象にして確認してみた。

- (3) El sacerdote notificó a la Comisión Nacional de los Derechos Humanos del caso de Maritza, quien perdió una pierna **después de que** guardavías de la empresa ferroviaria la *arrojaron* de un tren en marcha, en el que viajaba escondida. («Presiona INM a guatemalteca que denunció a TFM», *La Jornada*, México.D.F.: jornada.unam.mx, 2005-04-20)

「その司祭は、国家人権委員会に対して Martitza 事件を告発した。彼女は鉄道会社の保線係によって、自身が隠れていた走行中の列車内から外へ投げ出されて（投げ出された後）片足を失ったのである」（付帯状況 / 原因）¹⁴⁾

- (4) ...sujetos armados ejecutaron a un hombre, mientras que un empresario hotelero quedó herido, **después de que** individuos *dispararan* cinco veces en su contra... («Comando ejecuta a un hombre frente a sus dos hijos en Tijuana», *El Universal.com.mx*, México. D.F.: el universal.com.mx, 2006-04-26)

「武装した数人が一人を殺害し、一方（の事件）では、数人があるホテル経営者に対し 5 回発砲して（発砲した後）負傷させた」（付帯状況）

(3)で問題にされているのは、彼女が片足を失った経緯についての時間的前後関係ではなく、その原因である。「列車内から外へ投げ出された後片足を失ったのである」と訳すと座りが悪くなるのはそのためである。また、(4)に関しても同様の指摘が可能で、ホテル経営者が負傷したのは発砲の後であるのは自明であり、ことさら時間的關係に言及する必要性はない。ここでも「5回発砲した後負傷させた」という日本語訳は、非常に座りが悪いものであり、発砲のあと他の方法でも負傷させたかのような印象を与えてしまう。したがって、これは文脈から付帯状況にしか捉えられない。つまり、両用例とも、*después de que* が主節に対して表している論理関係は、純粋な時間関係（従属節の行為が起こった後で主節の行為が起こったのだという関係）ではなく、主節に対して単に前時を表すことによって、実際の関係（原因や付帯状況など）の判断は、聞き手に委ねているのであろう。ただ、そこで使われている動詞形式には、それほど偏りはなく（例数が少ないのでなんとも言えないが）、(3)では点過去が(4)では *-ra* 形であり、次の(5)は *-se* 形である。

- (5) Mundhra afirmó que "me quedé fascinado por ella (Sonia) **después de que** *tomase* la decisión de rechazar el puesto de primera ministra tras las elecciones generales de 2004. («Mónica Belucci será Sonia Gandhi», *El Universal.com.mx*, México.D.F.: el

universal.com.mx, 2006-06-07)

「Mundhra は、『私は、Sonia が2004年の総選挙で選ばれた首相の地位を捨てる決心をして（した後）、魅了されてしまったよ』と述べた」（原因 / 付帯状況）

そして、このようないわゆる「抽象的時間関係」の用例は、102例中5例¹⁵⁾のみであった¹⁶⁾。辻井（2003）によると、スペインにおける1990年代の-ra形43例と1970～1990年代までの点過去と直説法過去完了形17例の合計である60例を調査したところ、その内20例が抽象的時間関係を表す用法であったことがわかっている。とすると、メキシコの102例中の5例は極めて少ないと言ってよい。

2.4. 社会言語学的アプローチ

Lunn（1995, p.432）は、時事文の色合いを出そうというメタ言語的機能ということ述べている。メキシコの過去指示 *después de que* での直説法と接続法の選択率がほぼ50%である現状では、文体論的差異という可能性もあり得る。そこでこの節では、母語話者によるアンケートにより、社会言語学的な偏りはないか検証してみたい。アンケートは、メキシコシティ生まれ、あるいは在住の10代から60代までの男女46名（男：21名、女：25名）に対して実施した¹⁷⁾。

2.4.1. 第1アンケート

このアンケートは、ひとつは直説法点過去、もう一方は接続法過去-ra形が使われている *después de que* の例文を1例ずつ計2例あげ、それぞれの動詞形式を不定詞にして、直感で適切な活用形式にしてもらうというものである。対象の例文は次の2例で、(A)には *muriera* を伏せて (*morir*)、(B)では *revelaron* のかわりに (*revelar*) として表示し、適切に思える動詞形式を回答してもらった（第1アンケート）。

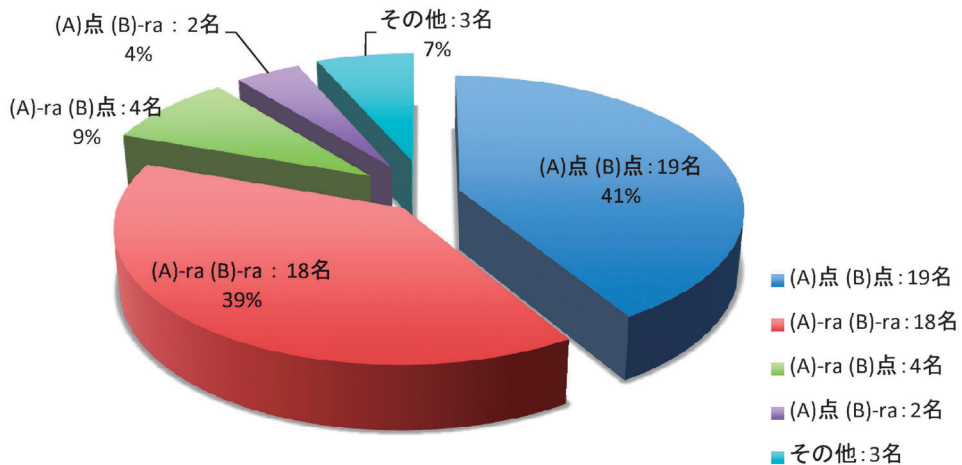
- (A) Mozart escribió sonatas en las horas más amargas de su vida. La 545 la compuso dos días **después de que** una de sus hijas muriera "de hambre". (1996, PRENSA, *Diario de Yucatán*, 24/07/1996: "El coraje de creer en uno mismo", MÉXICO
「モーツァルトは、彼の人生の最も辛い時期にソナタを書いた。ソナタ k.545は、娘のひとりが餓死した二日後に作曲したものである」
- (B) La semana pasada, Abraham tuvo que aclarar su relación con Raúl **después de que** informaciones de diarios extranjeros y nacionales revelaron que habían sido

socios. (1996, PRENSA, *Proceso*, 07/07/1996 : “SEIS AÑOS DE SALINATO Y LA AMISTAD DE RAÚL, DEJARON A ABRAHAM ZABLUDOVSKY LIST ...” , MÉXICO)

「先週、アブラハムは、ラウルと仲間であることを国内外の新聞で明かされた後、彼との関係を明らかにしなければならなかった」

まず、アンケート協力者全体を対象にして、表4で調査した2000年代メキシコにおける法の選択率がここでも当てはまるのかを確認しておきたい。(A)、(B)で選択された形式の組み合わせごとに集計したものがグラフ6である(「点」は点過去を表す)。(A)と(B)に別形式を選択した人の理由は定かでないが、両不定詞ともに同じ法を選択した人がほぼ同率に分かれた。これは表4で見た2000年代“Prensa”の結果とほぼ同じであり、これがメキシコの現状であると結論してはば間違いはない¹⁸⁾。(A)と(B)は元々それぞれ-ra形と点過去であったが、そのことによる影響はここでは認められないようである。

<グラフ6：第1アンケートの全体結果>



さて、この標本について、いくつかの社会言語学的観点から検証を行っていききたい。まず、男女、年代別による法選択の結果を表示する。

<表5：メキシコの過去指示 después de que における男女別による法選択>

	男	女	計
<(A)点 (B)点>	11名	8名	19名
<(A)-ra (B)-ra>	4名	14名	18名
<(A)-ra (B)点>	2名	2名	4名
<(A)点 (B)-ra>	2名	0名	2名
その他	2名	1名	3名
計	21名	25名	46名

(尤度比による χ^2 推定値 9.12 P=0.058)

<表6：メキシコの過去指示 después de que における年代別による法選択>

	10～20歳代	30～40歳代	50～60歳代	計
<(A)点 (B)点>	6名	12名	1名	19名
<(A)-ra (B)-ra>	4名	11名	3名	18名
<(A)-ra (B)点>	1名	3名	0	4名
<(A)点 (B)-ra>	1名	0	1名	2名
その他	0	2名	1名	3名
計	12名	28名	6名	46名

まず、表5で示した男女別の結果について、(A)、(B)の質問項目に別形式を選択した回答については後ほど触れることにして、<(A)点 (B)点>、及び<(A)-ra (B)-ra>を選択した回答について見てみると、点過去にはそれほどの偏りは見られなかったが、注意をひくのは、<(A)-ra (B)-ra>を選択した18名の中の14名が女性であったということである。元々の男女比に偏りがあるので、それを是正して計算しなおすと、約74.6%が女性への偏りがあるという結果である。これに関して、標本サイズが小さいため統計検定の結果は不安定であるとは言え、表5の下の括弧に統計的数値を示したように、データと理論との整合性の観点からは興味深い傾向が観察できたと言える。また、観点を改めて、<(A)点 (B)点>と<(A)-ra (B)-ra>を選択した男性被験者15名のうち11名が点過去を選んでいるのも女性と対照的で興味深い。表6で示す年代別の結果では、50～60歳代の数が少ないので信憑性に疑問は残るものの、どの年代も見たところほとんど偏りが無い。すなわち、偏りが無いというのが成果であって、2014年現在のメキシコの過去指示 después de que における点過去と-ra形の使用は、年代による差は認められないと言っていいだろう。

また、知的文書に接する機会の多さが法選択に影響を及ぼすかを知るために最終学歴別による統計調査を実施した(表7参照)。そして、その中での性差を調べると、直説法を選ぶことに関しては学歴に偏りは見られないけれども、接続法を選択することに関しては、絶対数が少ない中

等学校は別にして、どの学歴でも女性の方が多いという偏りが見られる。すなわち、<(A)-ra (B)-ra> を選択した男：女の対立が、それぞれ、大学院では0名：4名、大学では1名：5名、高等学校では2名：5名である。また観点を変えて、それぞれの学歴をもつ女性の中で、<(A)点 (B)点>と<(A)-ra (B)-ra> を選択した女性の内、どの程度が接続法を選択したかを観察すると、大学院出身者では女性8名中4名であり、点過去を選択した4名と同数で選択形式に差は出ない。しかし、大学や高等学校出身者では、前者は女性7名中5名、後者では女性7名中5名が<(A)-ra (B)-ra> を選択しており、ここでも女性の -ra 形への偏りが確認できる。

他に目立つ傾向といえ、大学院出身者の回答にある。<(A)点 (B)点>と<(A)-ra (B)-ra> の回答者に関して、男性大学院出身者の統計では、<(A)点 (B)点>が5名、<(A)-ra (B)-ra> が0であった。つまり、男性の大学院出身者の100%が点過去を選択したという結果である。表6で見たように、ふたつの形式の選択に年齢が無関係であるのならば、この傾向は何を意味するのか。これに関しては、大学や高等学校での偏りが曖昧なので、ここでは事実の指摘だけにとどめたい。

<表7：メキシコの過去指示 después de que における最終学歴別男女別による法選択> (単位：名)

	中等学校		高等学校		大学		大学院		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
<(A)点 (B)点>	1	0	3	2	2	2	5	4	19名
<(A)-ra (B)-ra>	1	0	2	5	1	5	0	4	18名
<(A)-ra (B)点>	0	0	0	1	0	1	2	0	4名
<(A)点 (B)-ra>	0	0	1	0	0	0	1	0	2名
その他	1	0	1	1	0	0	0	0	3名
小計	3名	0	7名	9名	3名	8名	8名	8名	
合計	3名		16名		11名		16名		46名

2.4.2. 第2アンケート

メキシコの1990年代には、次のように同一の después de que 節内における点過去と -ra 形の並列的な使用例がある。これに関して上記46人のアンケート協力者に対し、第1アンケートに加えて、このふたつの動詞形式が「適切 (Si)」、「不適切 (No)」、「疑わしい (Dudoso)」のいずれかを問い、そして、「不適切」や「疑わしい」を選んだのなら、それぞれどのような動詞形式が適切だと思うかを答えてもらった (第2アンケート)。

(c) La explosión ocurrió horas después de que nueve personas perdieron la vida y

otras 40 fueran heridas al estallar un artefacto en el aeropuerto internacional de Lahore, capital de Punjab, en el centro-este de Paquistán. (1996, PRENSA, *Diario de Yucatán*, 23/07/1996, "Atentados en un aeropuerto y un mercado de Paquistán causan 9 muertos ..." , MÉXICO)

「その爆発は、パキスタン中東部パンジャブ州の州都であるラーホールの国際空港で、仕掛け爆弾が爆発したことにより、9人が命を失い、40人が怪我をした数時間後に起こった」

結果は、「適切 (Si)」が21名、「不適切 (No)」16名、そして「疑わしい (Dudoso)」9名で、並列使用に肯定的な意見が21名であるのに対し、否定派が25名と若干否定派が上回っている。これを素直に捉えたと、やはり論理的理由であれ文体論的理由であれ、両形式にはなんらかの違いを認めないといけないのではと疑われる。

さて、その否定派の25名は次のような代替形式を回答した。

- (a) 両形式とも -ra 形にする (perdieran / fueran) : 9名 (男 : 2名、女 : 7名)
- (b) 両形式とも点過去にする (perdieron / fueron) : 6名 (男 : 3名、女 : 3名)
- (c) 両形式を別の形式にする (perdieron → perdieran / fueran → fueron) : 8名 (男 : 6名、女 : 2名)
- (d) その他 : 2名 (男 : 1名、女 : 1名)¹⁹⁾

ここでも特徴的なのは“(a) 両形式とも -ra 形にする”を選択した女性7名であろう。(c)を選択した者も相当数いるが、その理由は今のところ不明である。

2.4.3. 第1・第2アンケートの総合的判断

第2アンケートにおける代替形式の回答において、第1アンケート結果、すなわち不定詞を適切な活用にするタイプの回答と矛盾する者としめない者を洗い出してみた。次は、第2アンケートの (a), (b), (c) のそれぞれの回答において、第1アンケートの (A), (B) でどの形式を選んだかと、その人数を示している²⁰⁾。

<第2アンケート回答>	<第1アンケート回答>
(a) 両形式 : -ra 形	男 : <(A)-ra (B)-ra>1名、<(A)点 (B)点>1名
	女 : <(A)-ra (B)-ra>5名、<(A)点 (B)点>2名
(b) 両形式 : 点過去	男 : <(A)点 (B)点>5名、<(A)-ra (B)-ra>0
	女 : <(A)点 (B)点>0、<(A)-ra (B)-ra>2名、その他1名
(c) 両形式 : 別形式	男 : <(A)-ra (B)-ra>1名、<(A)点 (B)点>3名
	<(A)点 (B)-ra>1名、<(A)-ra (B)点>1名 女 : <(A)-ra (B)-ra>2名、<(A)点 (B)点>0

ここで最も注目したいのは、(a) と (b) の囲み線の箇所である。すなわち、(a) の女性 5 名は、第 1 アンケートの (A)(B) でも -ra 形を、第 2 アンケートでも -ra 形を一貫して選択した人達であり、女性が -ra 形を選択しやすい傾向にはかなりの信憑性があると見ていいのではないか。また、それを裏付けるように、(b) で見るように第 2 アンケートで両形式を点過去にした女性は 0 であった。また、(b) で確認できるように、第 2 アンケートで〈(A) 点 (B) 点〉を選択した男性 3 名は、第 1 アンケートでも一環して点過去にした人達であり、これも (a) の結果が示すように -ra 形を好む男性が 1 名のみという男性の保守的な傾向と一致する。ただし、(c) における囲み線の箇所であるが、第 2 アンケートでも点過去と -ra 形という異なった形式を選ぶという意味で矛盾がないということになるが、これについては判断を控えたい。

さて、大学や大学院出身の人達は、第 2 アンケートで何を選択したのだろうか。表 8 でわかるように、肯定的回答と否定的回答が 12 名：15 名に分かれた。過去指示 después de que において点過去と -ra 形が半分程度の分布であるメキシコにおいて、両形式が併存するのも理解できるし、なんらかの要因により、どちらかに偏ることもまた頷ける。ただ、高学歴者の否定的回答 15 名の中で、(a) の“両形式とも -ra 形”を指示した 7 名中 6 名が女性であり、やはり女性の -ra 形への偏重が認められる。

<表 8：第 2 アンケートにおける大学及び大学院出身者の回答> (単位：名)

		大学		大学院		小計	合計
		男	女	男	女		
「適切 (Sí)」		2	4	2	4		12 名
不適切 (No) 及び、「疑わしい (Dudoso)」	(a) 両形式とも -ra 形	0	2	1	4	7 名	15 名
	(b) 両形式とも点過去	0	2	1	0	3 名	
	(c) 両形式を別の形式	1	0	4	0	5 名	
	(d) その他	0	0	0	0	0	
小計		3 名	8 名	8 名	8 名		
合計		11 名		16 名			27 名

2. 5. después que について

辻井 (2008) においては、después de que と después que について、1950 年代から 1990 年代までの各年代の前後半に分けて調査し、両者の頻度と法選択の関係を論じた。そこで実施した頻度調査において認められた傾向は、当初は después que の方が多く使われていたのだが、次第に頻度が下がってきて、1970 年代の後半には después de que に取って代わられるよ

うになった。そして、それに伴う法選択は、当初はいずれの場合も直説法が優勢であったが、やはり1970年代の後半を境に接続法が優勢になってくるのである。数値の推移を観察すると、*después de que* の法選択に引っ張られる形で *después que* の法が追随しているように見える²¹⁾。そこで、簡単にはあるがメキシコにおける *después que* について2000年代（2000年～2009年）の法選択をまとめておきたい。*después que* で使われる法が *después de que* のそれに追随するという上記の観察が正しいのであれば、現在はまだそれほど接続法化が進んでいない事が予想される。

<表9：después que における法・時制形式（2000年代メキシコ “Prensa”）>（単位：例）

法	形式	各法の例数（割合）	各法の例数（割合）
直説法	点過去	32 (80.0%)	36 (90.0%)
	未完了過去	1 (2.5%)	
	過去完了	3 (7.5%)	
	直前過去	0	
接続法	-ra 形	4 (10.0%)	4 (10.0%)
	-se 形	0	
	過去完了(-ra)	0	
合計		40 (100%)	40 (100%)

予想通り、圧倒的に直説法が優勢である²²⁾。今後、*después de que* での接続法使用が増大するにつれ、それを追いかける形で接続法が増えていくことが予想される。ただし、*después que* 自体は姿を消すか減少していきだろうが、次のような一種の比較表現として名詞や代名詞を補語として生き残っていく可能性はある。

- (6) Otros mexicanos que también estuvieron en nuestro Campamento Base fueron Carlos Carsolio y su esposa Elsa, quienes llegaron a ese lugar quince días **después que nosotros**. (1990, Torres Nava, Ricardo, “La Conquista del Everest”, *Diana*, MÉXICO,)
 「基地にいた他の人達の中には、Carlos Carsolio と妻の Elsa の姿もあり、彼らは我々よりも15日早くに到着した」

3. まとめ

以上、イスマノアメリカにおける *después de que* の法の分布を概観し、1990年代の調査でスペインとは正反対の傾向を示す国の中で、メキシコの現状について、論理的（意味機能的）観点からと社会言語学的観点からの調査を試みた。

まず、論理的観点からの観察であるが、辻井（2003）によると、スペインにおける1990年代の *-ra* 形43例と、1970～1990年代までの点過去と直説法過去完了形17例の合計である60例を調査したところ、その内20例が原因、逆接、付帯状況などの抽象的時間関係を表す用法であったことがわかっている。とすると、メキシコの102例中の5例は極めて少ないと言ってよい。これはどう考えるべきか。スペインの過去指示 *después de que* では、1970年代ではすでに88%が接続法で使われていた。一方、メキシコにおいては、1990年代では接続法使用率がたった16.3%であったものが、2000年代になって急激に上昇して44.1%になった。にもかかわらず、スペインにおいて比較的豊富であった *después de que* の拡張的な用法（抽象的時間関係を表す用法）がそれに伴わず数が少ない。今のところこれを説明する論理的な説明は考えつかない。ただ、可能性として、スペインの言語使用の影響ということは考えられるであろう²³⁾。ある言語変化の要因を、別の地域における言語使用の影響と判断することには慎重でなくてはならないが、今のところ、統計的な数値や論理の見地から、その可能性が高いのではないかと考えているが、最終的な結論は今後の課題としたい。

また、スペインの言語使用の影響からか、あるいは他のなんらかの要因で発達した過去指示 *después de que* における接続法の使用について、社会言語学的な偏りを知るために、メキシコ人10代から60代までの男女46人を対象に行ったアンケートを実施した結果、データベースでの調査と矛盾することなく、過去指示 *después de que* における法選択は、直説法と接続法がおおよそ半分という結果が得られた。中でも特徴的なのは女性に接続法 *-ra* 形を選択する傾向が見られたということである。筆者の身近にいるメキシコ人（30歳代女性）に過去指示における *después de que* において自由記述の形でアンケートを実施してみたところ、点過去を回答した。そして、両形式の違いを尋ねてみると、*-ra* 形の方が教養的な響きがあり、“*Suena más elegante*” であるという回答があった。本論文の調査結果である男女間の差は、現代メキシコにおいては有標の形式である接続法（“*Libro*” での調査では接続法選択率はたった20%である）を選んだ場合、上記のような文体論的效果には女性の方が敏感である、ということの現れであろうか。さらに詳細な検証が必要である。

ただし、理解しないとイケないのは、アンケートにおいて、女性が“過去指示 *después de que* + *-ra* 形”を選ぶ傾向にあるからといって、女性がそれを日常的に使用しているということとは意味しない。すなわち、同統語条件下の *-ra* 形が、新しい用法であり有標であるからこそ、

女性が選ぶ言葉の規範や理想としてのみ存在する可能性があるからである。

メキシコの同用法に関して、おそらく今後は他の地域と同じように接続法化の道を辿ることになるであろうが、その意味機能や社会言語学的観察には、現在のような分布状況が最適であると考えて論を進めてきた。ただし、ある言語変化について、他地域の言語使用からの影響という結論には、常に慎重でなくてはならない。そのために、después de que における法選択の通時的、及び共時的頻度分布調査、従属節語句自体の拡張的意味機能の頻度分布調査、そして社会言語学的調査を行ってきたが、特にスペインにおける言語使用の影響を立証するためには、今後もっと詳細な検討が必要である。

さて、スペイン語教育において、「過去指示 después de que には接続法を使います」と言えるかどうか。本稿における検証から、世界的にはそれはまだまだ定着していないことがわかった。あるいは、たとえそう言ったとしても、地域変異に関する但し書きが必要であろう。

注

* 本稿は、2014年4月20日、関西学院大学大阪梅田キャンパスにおいて開催された関西スペイン語学研究会第373回例会での口頭発表に基づくものです。参加者の皆さんに貴重なご意見をいただき、心から御礼を申し上げます。

- 1) 過去指示 después de que に使用される -ra形については、直説法であるとする向きもあるが（江藤 1993、R.A.E.1979、González Ollé 2012など）、スペインでは-se形が相当な広がりを見せていることから（辻井2008の調査では、1990年代の“Periódicos”と“Revistas”や“Libros”で30%を超えている）、筆者はdespués de que の法環境の変化であり、したがってここで使われる形式を接続法であると捉えている。
- 2) Zona Antillasの各国に関しては、ヒット数が少ないため、ここでは統計に含めない。調査結果は次のとおりである。

<Zona Antillasにおけるdespués de queの法（1990年代“Periódicos”と“Revistas”）の内訳>

	Cuba	Puerto Rico	Rep. Dominicana	計
直説法	1 例	1 例	2 例	4 例
接続法	0 例	3 例	6 例	9 例
計	1 例	4 例	8 例	13 例

- 3) 各国・地域とも1990年～1999年の範囲で調査しているが、Méxicoは、個々の文について意味判断ができる適切な用例数に制限するため、1994年～1996年とした。
- 4) 江藤（1993）、R.A.E.(2009, p.1806)、Luquet(2004, p.18)など

- 5) Zona Andinaは、Perú, Bolivia, Ecuadorのそれぞれにおける例数が少ないので、3ヶ国の合計で統計をとった。内訳は次のとおりである。

<Zona Andinaにおける después de que の法 (1990年代 “Periódicos” と “Revistas”) の内訳>

	Perú	Bolivia	Ecuador	計
直説法	6 例	4 例	6 例	16 例
接続法	10 例	5 例	3 例	18 例
計	16 例	9 例	9 例	34 例

- 6) 1990年代の他の国々・地域 (“Libros”) の調査結果は次のとおりである。

	Arg.	Chile	Colom.	Zona Andina
直説法	3 例	10 例	5 例	1 例
接続法	13 例	5 例	8 例	5 例
計	16 例	15 例	13 例	6 例

- 7) 1990年代までの調査に使用したCREAは2004年までしかカバーしていないので、2000年代の調査には、2012年の12月から使用可能になったCORPES XXI(Corpus del español del siglo XXI)を利用した。調査期間は原則として2000年から2009年であるが、Españaは2005年のみ、Méxicoは2004年～2006年に限った。
- 8) 接続法111例の内訳は、-ra形：90例、-se形：19例、-ra形（複合形）：1例、-se形（複合形）：1例であった（例数制限のため、Temaを“Actualidad, ocio y vida cotidiana”，“Artes, cultura y espectáculos”及び“Ciencias sociales, creencias y pensamiento”に限定した）。
- 9) 詳しい内訳は、直説法：点過去18例、過去完了形1例、接続法：-ra形62例、-se形(単純形)1例、-se形（複合形）1例である。
- 10) después que (de queではなく) の形ではあるが、Méndez García de Paredes (1995) は、中世スペイン語に原因の意味で使われている例を見いだしている。ただし、その数は少なく、原因の意味を担うのは、その後ももっぱらpues queであって、después queは基本的には時を表すものとして残っていったと述べている (p.144)。このような中世のpues queとdespués queの例に関しては、辻井 (2008, pp.98-100) を参照。なお、Rivarola (1976) は、そのようなpues queと después queが未だその意味機能が未分化であった13世紀においても、pues queが原因と共に譲歩の意味でも使われていた例があると述べている (p.116)。
- 11) ...hay una explicación semántica...que permite ciertos desplazamientos del «tiempo» a la «causa»: una relación temporal se convierte en consecuencia temporal («luego»), y de ahí se pasa insensiblemente a la consecuencia lógica («pues»), «en consecuencia») y a la «causa material». (Méndez Gracia de Paredes, 1995, p.142)
- 12) 「原因」と「前時性」の相関性は、現代では原因を表す pues queが古典ラテン語のPOSTQUAM (～

の後で)を起源としている事実からも確認できる (Méndez Gracia de Paredes, 1995, p.139)

- 13) 福罵 (1976) によると、文は、叙述内容 (素材) と叙述内容に対する話者の判断 (陳述) の二要素から成っており、直説法は陳述性の高い動詞形態であり、接続法は素材性の高い動詞形態であるとしている。
- 14) ここでいう付帯状況とは、ふたつの事態が同時に起こることではなく、ほぼ連続して起こることを指している。
- 15) 他の2例は次のとおりである。

El Parlamento de Irak acordó ayer extender una semana las negociaciones sobre la Constitución del país, **después de que** los políticos *solicitaron* más tiempo para alcanzar un acuerdo. («Irak: dan más días para Carta Magna», *El Universal.com.mx*. México.D.F.: el universal.com.mx, 2005-08-16) 「イラク議会は、憲法議論について、合意には時間が必要であるという政治家達の要請を受けて (要請された後で)、1週間引き延ばすことを昨日決定した」 (原因)

La organización benéfica del heredero de la Corona británica utilizará este magno evento para recaudar fondos y lanzar una campaña publicitaria, **después de que** el ministro de economía, Gordon Brown, *decidiera* retirar la subvención de unos 58,5 millones de euros... («Organización del príncipe Carlos festejará 30 años», *El Universal.com.mx*. México.D.F.: el universal.com.mx, 2006-08-25) 「英チャールズ皇太子の慈善団体は、経済大臣のGordon Brownが5,850万ユーロの助成金を回収することを決定したので (決定した後)、この大イベントを利用して、資金を取り戻すためパブリックキャンペーンをするだろう」 (原因)

- 16) もちろん最終的な判断は、話者の発話態度によるので、それが純粋な時間関係か、あるいは原因や付帯状況などを表す抽象的時間関係を判断するのが困難な場合もある。後者であると判断するのはそれが明白な場合で、前者と捉えると奇妙な場合だけに限った。したがって、次の例などは、どちらの可能性もあるが、純粋な時間関係であると判断している。

Por fin, el miércoles por la noche, la Secretaría General de Salud y el hospital decidieron interrumpir el embarazo de ocho semanas de la menor, **después de que** el fiscal general, Mario Iguarán, y el procurador Edgardo Maya, *dijeron* que en este caso el aborto era procedente y no incurrirían en ningún delito. («Practican aborto a niña violada en Colombia», *El Universal.com.mx*. México.D.F.: el universal.com.mx, 2006-08-25) 「保健省の長官と病院は、この件については、墮胎は妥当であって犯罪にはあたらないという司法長官Mario Iguaránと訴訟代理人Edgardo Mayaの見解を受けて (見解があったので / 見解のあと)、ついに水曜日の夜、この未成年者に対して8週での中絶を決定した」

- 17) このアンケートの実施は、メキシコのInstituto Nacional de Pediatríaの村田千春氏の協力を得た。また、氏には統計処理の面でも大変お世話になり、心から感謝するしだいである。彼の助力がなければ、これほどの規模のアンケートは実施できなかつたであろう。
- 18) その他の3名の回答は (A: moriría, B: revelarían)、(A: murió, B: revelarían) 及び (A: murió, B: revelarían) であった。

- 19) この2人について、元の perdieron/fueran をそれぞれ、男性の方は derrotados/quedaran lastimadas、女性は pierden/están heridas、と交換すると回答した。
- 20) (d)はまったく別の形式を回答しているので、ここでは問題にしない。
- 21) 辻井 (2008) pp.103-104
- 22) R.A.E.(2009, pp.1958-1959)は、después que は接続詞句として扱われるが、その que は después のもつ比較の性質 (naturaleza comparativa) に由来するのだと述べている。また、Bosque(1990, p.217)も antes que と antes de que を例にとって同じことを述べているが、ここでの議論には影響しない。それは、辻井 (2005) の通時的調査で13世紀まで遡っても、después que と共に使われているのはほとんどが節であって、名詞や代名詞は皆無であり、名詞、代名詞を補語として従えていたのはむしろ después de だからである。すなわち、近代になってから、比較の性質を前面に出して que を用いて名詞、代名詞を従える después が発達し、節を導く que と 2系統存在したのではないかと考えられる。したがって、ここで扱っているのは節を従える用法なので、después que と después de que の形態統語論的変遷の原因とはなんら関係がないと考えられる。
- 23) Pérez Saldanya (1999, pp.3314-3316) のいう直説法と接続法の使いわけによる情報構造の差は辻井 (2003) でも支持したことであるが、叙実的な統語環境である過去指示 después de que での法が、スペインにおいてほぼ100%接続法である現在の用法の差としては考えにくい。

参考文献

〈邦文〉

- 江藤一郎 (1994) . 「時事スペイン語における”接続法過去形”について」『外国語教育』20, pp.1-12、天理大学外国語教育センター.
- 辻井宗明 (2003) . 「現代スペイン語における過去指示 después de que の法について」、『関西外国語大学研究論集』77, pp.61-80
- _____ (2005) . 「"después de que"はdequeísmoか —dequeísmo研究への提言—」、『関西外国語大学研究論集』81, pp.45-57.
- _____ (2008) . 「過去指示 después que と después de que における『抽象的時間関係』と叙法の相関性について」『関西外国語大学研究論集』88, pp.93-112.
- 福嶋教隆 (1976) . 「イスペイン語接続法の研究—その本質的機能に関して—」*STUDIUM* 5, pp.67-71, 大阪外国語大学大学院研究室.

〈欧文〉

- Bosque, Ignacio(1990). *Las Categorías Gramaticales. Relaciones y Diferencias*. Editorial Síntesis, S.A., Madrid.

- González Ollé F. (2012). *Continuidad histórica ininterrumpida de la forma -ra indicativo. Tradiciones discursivas y sintaxis*. ENUNSA, Pamplona
- Lunn, Patricia V.(1995). "The Evaluative Function of the Spanish Subjunctive", *Modality in Grammar and Discourse*, pp.429-449, Edited by Joan Bybee and Suzanne Fleischman, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Luquet, Gilles. (2004). *La teoría de los modos de la descripción del verbo español*, Arco/Libros, Madrid.
- Méndez Gracia de Paredes, Elena(1995). *Las oraciones temporales en castellanomedieval*. Universidad de Sevilla.
- Pérez Saldanya, Manuel (1999). "El modo en las subordinadas relativas y adverbiales" en I. Bosque y Violeta Demonte (eds.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Tomo II, pp.3253-3322, Espasa-Calpe, Madrid. [和文要約：福嶋教隆（2001）.「関係節・副詞節中の叙法」（第50章）『スペイン語記述文法 章別和文要約』*Lingüística Hispánica*, Anexo 1, pp.80-88, 関西スペイン語学研究会]
- Real Academia Española (2005). *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, (6^a ed.), Espasa-Calpe Madrid.
- _____. (2009). *Nueva Gramática de la Lengua Española*, Espasa Libros, Madrid.
- Rivarola, José Luis(1976). *Las conjunciones concesivas en español medieval y clásico*. Max Niemeyer Verlag Tübingen.
- Tsujii(2008). "DESPUES QUE Y DESPUES DE QUE referidos al pasado", *Lingüística Hispánica*, No.31, pp.97-119.

電子資料

- Real Academia Española. Corpus de Referencia del Español Actual (CREA<<http://corpus.rae.es/creanet.html>>) (2014年2月アクセス)
- _____. Corpus Diacrónico del Español (CORDE<<http://corpus.rae.es/cordenet.html>>) (2014年2月アクセス)
- _____. Corpus del español del siglo XXI (CORPES<<http://www.rae.es/recursos/banco-de-datos/corpes-xxi>>) (2014年3月アクセス)

(つじい・むねあき 外国語学部教授)